

義務教育学校における 教育内容の確立	中期（3年間） 経営目標	短期（今年度） 経営目標（3／3）	目標達成のための手立て	評価指標	自己評価		学校関係者評価		改善計画
					評価	結果と課題の説明	適正	意見等	改善案
確かな学力	変化の激しい社会を生き抜くために必要な資質・能力を育成する。	児童生徒が、深い学びを自覚し、学びに向かい続ける授業づくりを進める。	自己の学びを振り返る場の推進 ・各教科における振り返り ・「学びのカード」の活用 ・児童生徒、教職員での共有 校内研修の充実 ・授業観察と改善 ・授業での問いの工夫（問いの3階層）	・本校で育成したい資質・能力に係るアンケート調査（児童生徒、職員）の肯定的回答80%以上 ・授業観察者の「評価シート」による肯定的回答75%以上を継続	B	・資質・能力に関するアンケート調査の肯定的回答の平均は、児童生徒：70%、職員：72%であった。資質・能力のみと、特に話的な学びに対しての児童生徒の肯定的回答が高かった。一方で情報収集力は50%と低かった。情報収集の場面はあるものの、主体性を伴った調べ学習になるよう教師の意図的な働きかけが必要であると考えた。以上の結果から達成度は91で、評価はBである。 ・「評価シート」による肯定的回答は86%であった。9年間の系統的な授業づくりやキャリア教育の視点に基づき振り返りの充実などで、単元開始の頃には児童生徒の自ら学ぶとする態度に一定の成果が得られた。以上の結果から達成度は115で、評価はAである。	○	・義務教育の系統性を生かした指導で、9年間の伸びを感じることができる。 ・前期課程への課題を感じる。学習規律を整え、基礎学力を定着させることで、さらに9年間の成長を期待する。 ・学力など数値で測れるものと、数値に現れないものもある。前期課程の取組みなど改善の余地がある。 ・子供たちに「なぜ学ぶのか」を考えさせ、教えていってほしい。 ・各学校の特性に応じた特色のある教育が教育的効果へと繋がる。また、発達段階に応じ、スキルの習得、他教科や生活への活用とレベルを上げていくことが、生きたコミュニケーション能力の育成につながるのではなかろうか。	・児童生徒の資質・能力の向上のために以下の取組みを行う。 ①資質・能力向上のための振り返りの充実 昨年度、精選した4つの目指すべき資質・能力を児童生徒が自覚していけるように、普段の授業での振り返りの時間の確保や質的向上を目指す。教師側の意図的な発問や「書く」力を高める指導などで、振り返りを見守り、「なぜ学ぶのか」を常に考え続けさせることのできる指導を行う。 ②各教科や総合的な学習の時間、ことは探究科の授業改善 各教科や総合的な学習の時間において、児童生徒が自分事の問題や課題をもって学ぶ姿を目指す。また、ことは探究科においても、既存の指導法に頼るのではなく、確かな教材解釈による指導法の改善を行う。どの授業においても、「問いを生かした発問の工夫」を。授業改善の柱として授業研修等を行う。 ・基礎学力を確実に定着させるために以下の取組みを行う。 ①朝の学活で、補充学習の時間を確保し、最後までやらせ切り、児童生徒に力が付いたことを実感させる。また、朝実施することで落ち着いて1日を始められるようにする。 前期課程は火、木曜日に一斉に認知力、国語、算数の基礎学力定着を図る学習に取り組む。 後期課程は、月、水、金曜日に3教科の基礎学力定着を図る学習に取り組む。 ②学力調査の結果をもとに、各教科で苦手分野の再学習を計画・実施する。
		基礎学力の確実な定着と向上を図る。	ことば探究科による言語技術の習得 学力分析による授業改善 朝及び帰りの学活での継続的なドリル学習の実施 ICTを効果的に活用した授業づくり	・言語技術を習得し、5段階ルーブリックの評定が2以下または3段階ルーブリックの評定1以下の児童生徒 15%以下 ・全国学力・学習状況調査および市統一学力調査等の平均正答率が 30%未満の児童生徒 15%未満	A	・言語技術は2学期末の段階で、3段階中1(c)以下の児童生徒は9%であった。取組の継続で、少しずつ上昇が見られる。学年末のテスト及び日々の見取りから引き続き検証を行っていく。達成度は107であり、評価はAである。 ・全国学力・学習状況調査及び市統一学力調査の平均正答率が30%未満の児童生徒は、国語3%、算数・数学9%、社会10%、理科10%、英語20%で、全調査の平均は10.4%であり目標を達成している。達成度は105であり、評価はAである。	△		
地域と創る学校	地域と共に創造する児童生徒を育成する。	発達段階に応じて、地域学習を展開し、地域へ発信をする。	キャリア教育を中核とした新カリキュラムを開発・実践及び地域への発信をする	・地域に開かれた教育課程に係るアンケート調査とキャリア教育に係るアンケート調査（児童生徒、保護者、地域住民）の肯定的回答80%以上 ・キャリア通信の発行及びHPへの掲載 年間3回以上	B	・児童生徒を対象とした「地域と創る学校アンケート」では、「学校での学びを通して地域に貢献して知ることができている」の肯定的回答が83%、「地域や家族と話している」の肯定的回答は81%と、いずれも目標値に達し、達成度は102となり評価はAである。同じく保護者と地域を対象としたアンケートでは、全ての項目の平均値が80%であった。達成度は100で、評価はAである。 ・キャリア教育通信を毎学期発行したり、新聞や情報誌に掲載したりしたことで、キャリア教育の取組等を昨年度より広く周知することができた。しかし、HPへの掲載が十分にできていないことから、評価はBである。	○	・長いコロナ禍は、地域・保護者・子供たちの人間関係にも影響を及ぼしている。人と人との繋がりや地域の活性化のために、学校や学校運営協議会が核となる必要がある。 ・子供たちが地域行事の見直し等にも参画したり、新たな行事の提案を積極的にしたりしてほしい。 ・教職員や学校運営協議会とPTA役員が関係性を豊かにするためにも、親睦会などを計画してもらいたい。 ・子供たちの地域への参加や参画とともに、保護者が地域に出てこられるような取組みも計画していきたい。	
		児童生徒が地域と協働及び参画しようとする地域づくりを進める。	CS各組織や地域・企業と連携し、地域学習の充実を図る。 学校運営協議会（地域活動部会）や産業界、他校との連携充実を図る。	・地域行事や地域産業界と協働する活動へ参加した児童生徒90%以上 ・地域と協働し、活動に参画した生徒80%以上	B	・地域行事や地域産業界と協働する活動への参加は92%であった。6年生は3学期に地域との学習を計画している。以上の結果から達成度は102であり評価はAである。 ・地域と協働し、活動に参画した生徒は61名68%であった。コロナ禍で自粛されていた地域行事も夏以降復活しつつあり、参画率として昨年度の1.8倍であった。以上の結果から達成度は85であり評価はBである。	○	・地域行事への参画について、以下の取組みを行う。 ①児童生徒会の活動として、地域へ参画する取組を行う。 ②次年度も町内会の方々と児童生徒の協議会を実施する。そこで決定したことを、校内で町内会ごとに児童生徒に周知する時間を確保する。 ③地域の行事などを紹介するコーナーを、エントランスに設け、児童生徒が自分たちの地域について知る場を設ける。	